

アレキシサイミア傾向者の主体意識と強迫的構えについて

○横山 舜

(¹青山学院大学)

キーワード：アレキシサイミア，主体，強迫

Investigation of subjective awareness and obsessive-compulsive posture in alexithymia-prone individuals

Shun Yokoyama¹(¹Aoyama Gakuin University)

Key Words: alexithymia, subject, compulsiveness

目 的

アレキシサイミアは、自身の感情を適切な言葉を使って表現できないことを中心とする特性群である (Sifneos, 1996)。その大元に主体を意識しにくいこと (梅村, 2014, pp. 35-37) が考えられており、それ故に情動や身体感覚を認識しにくいとされる。そしてアレキシサイミア傾向者のように強迫的構えが強い者は (種田, 1988, pp. 189-203 など)、主体の基盤となる身体感覚を認識しにくいことにより、我が身がどうなってしまうかわからない自己存在が揺らぐ恐怖があるため、からだを拒否し信頼せず、不測のものに身を任せられず、絶え間なく物事を制御し続けているという (福留, 2000)。こうした強迫的構えのある者のセラピーの機序として、福留 (2000) は、任せる体験により強迫的構えが強い者が拒否し制御してきたからだとの関係が、受け容れやすく信頼できる受容的信頼のある関係になることを述べた。これらの主体意識について一部検討を行った研究として横山 (2023) があり、アレキシサイミア傾向者はそうでない者よりからだへの受容的信頼感や自分が壊れてしまわないという信頼が有意に低かった。本研究ではアレキシサイミア傾向者の強迫的構えに注目し、更に量的検討を行った。なお、本研究は青山学院大学研究倫理委員会および学長の承認を得て行った (承認番号: 青20-7)。

方 法

2022年9月から10月までの期間に質問紙調査を行った。

調査協力者

大学生133名 (性別: 男性35名, 女性97名, その他1名) / 年齢: 平均値20.04歳, 標準偏差=1.32)

質問紙の構成

1. The 20-item Toronto Alexithymia Scale (以下, TAS-20 とする) (小牧ら, 2003) TAS-20 は、アレキシサイミア傾向を測定する尺度である。20項目から成り、5件法で評価する。カットオフポイントがあり、総合点52点未満がアレキシサイミアなし (以下, N-Alex 群とする)、61点以上がアレキシサイミアとされる (以下, Alex 群とする)。
2. 失体感症尺度 (以下, STSS とする) (有村ら, 2012) STSS は、身体感覚の認識不全である失体感症傾向を測定する尺度である。22項目から成り、5件法で評価する。
3. からだへの受容的信頼感尺度 (横山, 2021) からだへの受容的信頼感尺度は、受容的信頼に関する感覚を測定する尺度である。10項目を4件法で評価する。
4. 思考の強迫性 強迫的心性尺度 (竹林, 2002) の下位尺度であり、抜粋して用いた。9項目を6件法で評価する。
5. 自己存在実感尺度原案 武内 (2018) の動作法体験尺度の下位因子である。本研究では動作法体験ではなく、普段の体験を訊ねた項目へ変更し、7項目を6件法で用いた。
6. 自分が壊れてしまわないという信頼 自分が壊れてしまわないという信頼は自己信頼感尺度 (寺崎, 2009) における下位尺度である。自己の存続や対象恒常性などを背景として項目が作成されている。9項目を6件法で評価する。

結果と考察

思考の強迫性と自己存在実感尺度、壊れてしまわないという信頼について、最尤法プロマックス回転で因子分析を行った。因数は固有値の減衰状況および各研究で1因子であったことから1因子とした。結果、思考の強迫性は6項目 ($\alpha=.738$)、自己存在実感尺度は7項目 ($\alpha=.729$)、壊れてしまわないという信頼は9項目 ($\alpha=.875$) を抽出した。

Alex 群は N-Alex 群より自己存在実感が有意に低く ($p<.000$, $d=-1.06$)、N-Alex 群は Alex 群よりも、思考の強迫性が有意に高かった ($p<.000$, $d=1.11$)。自己存在実感と自分が壊れてしまわないという信頼、自分が壊れてしまわないという信頼とからだへの受容的信頼感の間に有意な中程度の正の相関が認められた ($p<.000$, $r=.41$; $r=.44$; $p<.000$)。からだへの受容的信頼感と STSS 合計得点、STSS 合計得点と自己存在実感の間に有意な中程度の負の相関が認められた ($p<.000$, $r=-.46$; $p<.000$, $r=-.41$)。よって、アレキシサイミア傾向者の主体意識と強迫的構えについての理論は概ね支持された。

引用文献

- 有村 達之・岡 孝和・松下 智子 (2003) . 失体感症尺度 (体感への気づきチェックリスト) の開発 —— 大学生を対象とした基礎研究 —— 心身医学 52 (8), 745-754.
- 福留 瑠美 (2000) . イメージ体験が繋ぐからだと主体の世界 心理臨床学研究, 18(3), 276-287.
- 小牧元・前田基成・有村達之・中田光紀・篠田晴男・緒方一子・志村翠・川村則行・久保千春 (2003) . 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale (TAS-20) の信頼性、因子的妥当性の検討 心身医学, 43, 840-846.
- Sifneos, P. E. (1996). Alexithymia: Past and present. *American Journal of Psychiatry*, 153, 137-142.
- 武内 智弥 (2018) . 動作法体験をモデル化する試み —— 学生との1セッションのデータから —— 心理学研究, 88(4), 396-402.
- 種田 真砂雄 (1988) . 認知精神医学序説 —— 言語・イメージ・精神 —— 金剛出版.
- 竹林 奈奈 (2002) . 青年期における強迫的心性に関する一考察 —— 衝動性と制御の力動という観点から —— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 236-248.
- 寺崎 文香 (2009) . 青年期の自己信頼感尺度作成の試み 九州大学心理学研究, 10, 159-166.
- 梅村 高太郎 (2014) . 思春期男子の心理療法 —— 身体化と主体の確立 —— 創元社.
- 横山 舜 (2021) . オンラインでの臨床動作法による失感情症体験様式への働きかけに関する実験 日本心理学会第85回大会発表抄録集, 67.
- 横山舜 (2023) . アレキシサイミア傾向者のからだへの受容的信頼感と自他への信頼の関連 日本臨床動作学会第30回学術大会 第41回学会主催研修会プログラム集・発表論文集, 50-51.